

## セッション「社会研究所と批判理論の 100 年(2)」

司話人・報告者：宮本真也(会員・明治大学)

司会：橋本紘樹(会員・九州大学)

報告者：細見和之(会員・京都大学)

討論者：岩熊典乃(会員・大阪公立大学)

本セッションは『思想』(岩波書店)の2024年12月号の特集「フランクフルト社会研究所と批判理論の100年」を機に企画されたセッションのうちの一つである。本セッションでは、特集に寄稿した宮本真也(明治大学)、細見和之会員(京都大学大学院)の報告をもとに、現在の「批判理論」とその社会批判の可能性について議論を行った。司会は橋本紘樹会員(九州大学)、討論者は岩熊典乃会員(大阪公立大学)がつとめた。参加人数は約40名であった。

### 【第一報告】

社会研究所の現在の状況と「批判理論」の新しい課題

宮本真也

フランクフルト学派に由来する「批判理論」は、社会研究所(以下「IfS」)においては90年代に再開され、創立100周年をきっかけに独自の構想が示された。本報告では私はまず、アドルノ以降の経緯を確認後、IfSの「批判理論」の再構築の方針と現在の研究プログラムを概観した。IfSのこの試みはホネットの所長の時代に開始され、現在、レセニッヒが引き継いでいる。

レセニッヒ体制下のIfSでは、これまでの研究方針における西洋中心主義や自然軽視の態度が批判され、金融危機、移民、気候変動、パンデミックなどの事態が把握できないとされた。新たな研究プログラムは、危機を「矛盾のコンステレーション」として把握し、資本主義の生産性と破壊性の同根性を分析する「機能するものの危機理論」と、主体の行為に内在する変革可能性を探る「実践理論」を柱とする。具体的には、気候変動、レイシズム、主体化、右派権威主義、反ユダヤ主義などを対象に、グローバルかつ物質的な社会編成を解明する「批判的コンステレーション分析」が構想され、未来の「批判理論」の中核として位置づけられている。

次に私は、現在のイスラエルとパレスチナのあいだの紛争について「批判理論」の代表者が取る立場について、フォルストとハーバーマス、ベンハビブによる、一方でイスラム憎悪、他方で反ユダヤ主義をめぐる発言を紹介し、検討した。それらの発言には、紛争初期からの双方への配慮と、自らの視座への反省が含まれていた。本報告に対して岩熊会員からはIfSの1980年代の歴史修正主義をめぐる論争への寄与と、100周年記念行事の多くに見出される「マルクス主義」というタームの内実について質問が寄せられた。一つ目の問い合わせについては、歴史家論争へのIfSの寄与はあまり確認できること、むしろIfSの支

援者であったヴァイルの意志を継ぐレームツマによって設立されたハノーファー社会研究所の貢献のほうが重要であることを指摘した。また現在の IfS のプロジェクトにおける「マルクス主義」の扱いについては、気候変動と人新世をめぐる問題、収奪と搾取、レイシズムと植民地主義の問題と、批判実践の可能性を考察する場合には、現代の「批判理論」は「マルクス主義」に由来する概念や思想の吟味を改めて行っているが、まだ進行中の課題であるので情報提供の域を越えるほどのことは言えないと述べた。

[文責] 宮本真也

### 【第二報告】

社会研究所にとってのホロコースト－イスラエルのガザ地区への攻撃のなかで考える－  
細見和之（京都大学）

私がセッション報告を行なった時点では、イスラエルが過剰な報復攻撃を開始してまる2年以上をへたところだった。イスラエルの理不尽なまでに過剰な攻撃は世界中で非難を呼ぶ一方、「イスラエルへの批判は反ユダヤ主義である」というこれまた理不尽な主張がまかり通るかの現状が続いていた。反ユダヤ主義と理論的な闘いを続けてきたフランクフルト学派から見た場合、この状況はどう捉えられるのかという問題意識を持ちながら、とくにアドルノと反ユダヤ主義の関係を軸に、私が最近関心を寄せているレヴィナス、デリダとの対比を持ち込んで報告を行った。

アドルノはカトリック系の思想家と呼ばれるべきではないか、だからこそ被害者の立場だけでなく、加害者の立場からもホロコーストに向き合って語ってきたのではないか。それに対してレヴィナスは明確にユダヤ教徒としてホロコーストと向きあい、だからこそアドルノのように少なくとも表面的にはホロコーストへの批判を冗舌に綴ったりしなかったのではないか。しかし、ホロコーストの問題はレヴィナスのテクストに見えない磁力のようにして組み込まれているのではないか。そういう視点でアドルノとレヴィナスについて私は報告し、デリダについては、彼が1993年から94年にかけて行なっていた「証言－責任の問い合わせ」というセミナー、その一部として刊行された『滞留』、さらにデリダの没後10年に出版された『最後のユダヤ人』という講演録にもとづいて報告した。

討論者の岩熊会員からはパレスチナ問題にアドルノらがどう向き合ってきたかという質問が、会場からは、アドルノのジャズ批判などに見られる黒人に対する差別的な表現をどう思うか、という質問があった。人間はすべて特定の出自のもとで生まれ、特定の環境のなかで育ってゆくこと、アドルノがヨーロッパのブルジョア家庭に生まれ、クラシック音楽を大事にする環境で育っていったことからくる限界があつただろうと私は答えた。しかし、お互いのそういう限界を指摘し合うことによって偏見から脱してゆくことは可能なはずだとさらに私は付け加えた。

[文責] 細見和之

また、上記の報告と質疑応答にはさらにフロアからも、IfS の 100 周年記念行事について、昨年度のパレスチナとイスラエルの問題を扱った大会シンポジウムとの連続性について、「批判理論」が批判の端緒とする社会のメンバーの苦悩への応答可能性について、質問とコメント、情報が寄せられ、セッションは盛況のうちに終了した。学際性がその特色でもある「批判理論」、ないし「批判的社会理論」にとって、さまざまな専門分野で探求する研究者の集う社会思想史学会のセッションは、きわめて重要な場である。こうした議論が今後も継続し、理解が深まっていくことを期待したい。また、最後に、このセッションに参加し、有意義な時間に寄与してくださったみなさんに、心より感謝いたします。